

和歌山市立岡山幼稚園での 地震防災保育についての一考察

A STUDY OF THE PRACTICE OF EARTHQUAKE DISASTER MITIGATION FOR CARE AND EDUCATION IN OKAYAMA KINDERGARTEN

山田 伸之¹・丁子 かおる²
Nobuyuki YAMADA and Kaoru CHOJI

¹福岡教育大学教育学部准教授, ²和歌山大学教育学部准教授

著者らは、先の東日本大震災以前から保育園や幼稚園の子どもたちを主対象とした防災教育に関する取り組みを試みてきた[例えば、山田・丁子(2012)¹⁾]。本報告では、園と家庭・地域と一丸になって子どもたちの育ちを助け支えあう『防災保育』の和歌山市立岡山幼稚園での実践についてと保護者・保育者への事後アンケートから見えてきたことについて報告する。保護者へのアンケート結果からは、防災保育への肯定的な声があるとともに、今まで実践してきた他地域では顕在化しなかった地震や津波に対する漠然とした不安感があることが示されていた。また、一連の防災保育から、子どもたちと園、そして、家庭・地域での防災力を向上させる効果がある可能性を見出すことができた。この報告を機会に、今後の保育現場での防災保育への新たな方向性についての議論を高め、新たな展開のために端緒を見出したいと考えている。

キーワード：和歌山市立岡山幼稚園, 防災保育, 地震防災, アンケート調査

1. はじめに

年少の子どもたちなど災害弱者を対象とした様々な自然・人的災害に対する安全・安心への教育の充実化は、これまで以上に重要でかつ緊急性も高い。その中でも、自然災害の一つの「地震」に関する防災教育の充実化は、2011年の東日本大震災を契機にさかんに言われるようになってきた[例えば、文部科学省(2013)²⁾]。先の震災では、津波による激甚な災害が顕著となったが、津波よりも襲われる頻度・可能性が高く、突然でかつ時間的に真っ先に我々を襲う強震動(地震時の強い揺れ)に対する「基本的で正しい知識」と「身を守る方法」を体得させる機会の設定と備えへの意識の向上を図る必要がある、そのことは見逃されがちである。緊急地震速報[気象庁(2015)³⁾]などによって、強い揺れに見舞われるまでに何秒間かの時間ができたとしても、多くの場合、乳幼児などの災害弱者にとっては、猶予時間は極めて短く、心理的余裕は無いに等しい。

小中高等学校などの学校教育現場における防災教育への取り組みには、先の震災前から多種多様なものが見られ、進化も遂げられている[例えば、文部科学省(2010)⁴⁾]。また、保育園・幼稚園などの園児を対象にしたここ数年間での先駆的な取り組みとしても例えば、阿部・目黒

(2005)⁵⁾や伊村・石川(2006)⁶⁾などの報告があり、学校の事例に比べて多くはないものの、いくつかの積極的な取り組みが行われてきている。先の震災時の乳幼児の様子や保育園等の状況などについては、例えば、日本保育学会(2011)⁷⁾などでも知ることができる。

本報告では、著者らが数年来取り組んできた各種園での複数回の防災保育の実践活動[山田・丁子(2014)⁸⁾]のうち、和歌山市立岡山幼稚園での取り組みについて、実践後のアンケート調査結果とともに報告する。特に、災害に対する意識や考え方は、自然的・社会的環境が大人たち(ここでは幼稚園教諭や保護者)に影響し、防災活動に反映されると考えられ、和歌山県などは近い将来に地震による大規模災害の発生が危惧されていることから、園を取り巻く実態把握も本研究のねらいである。こうした幼稚園での防災保育の実践結果をもとに、今後、保育園や認定こども園なども含めた乳幼児を対象とした防災保育への新たな方向性についての議論を高め、新たな展開のための端緒を見出したいと考えている。なお、本報告は、災害弱者の集団(3~6歳児)である幼稚園での活動の取り扱いである。こうした園では、家庭・地域と一丸になって日常生活の中での子どもたちの育ちをサポートすることを意図しているため、一連の活動について、タイトルも含めて、ここでは「防災教育」ではなく、『防災保育』と記している。

2. 防災保育の概略

和歌山市立岡山幼稚園での防災保育は、2014年2月に実施した。保育活動の内容概略や実施・教材作成のコンセプトを図-1に示す。実践にあたっては、特別なイベントとしての扱いにならないよう配慮した。また園児が経験をもとに、自ら行動していけるようになることを念頭に置き、「強い揺れに見舞われた時」の対応として、危険察知→認知→回避・防御といった身の守り方や自らの力で何とかしなくてはならないことを体感的に知る(学んでいく)活動を中心に設定した。その中には、園児の発達年齢を考慮して、日常の活動との関わりと子どもたちどうしでの関わり合いを重視するとともに、遊びの要素や体感することを多く取り入れて、大人(保育者・保護者)も一緒にできる各種防災体験ツールを製作し、活用してきた[例えば、山田(2014)⁹⁾]。その製作には、子どもと保育者の両目線でのコンセプト(図-1)を設定し、方法や教材を構築した。これらには、劇を見る、話を聞く、歌を歌う、ダンスを踊る、そして疑似体験するという身体活動を通じた乳幼児期における保育内容の領域の「健康」や「環境」だけでなく「表現」「言葉」さらに「人間関係」に関わる内容まで領域を広範的に包含[文部科学省(2008)¹⁰⁾]するようにし、幼児の未分化な発達特性を考慮した内容とした。また、大学生とともに実践を行うことによって、将来の保育者や小学校教諭の卵としての意識づけと現職の保育者への意識・技能向上の意味を込めた活動にもするように心がけた。特に、現場保育者たちへの意識高揚としても、自分たち自身の力で継続的に実施することができる、やればできるという意識を植え付けることは重要な点と考えた。こうした保育者など大人への再教育は、園内外における各種災害発生への芽を摘み取っていく大人の役割を認識させることにも一役買うことができると考えられる。図-1に記す「体験的理解」

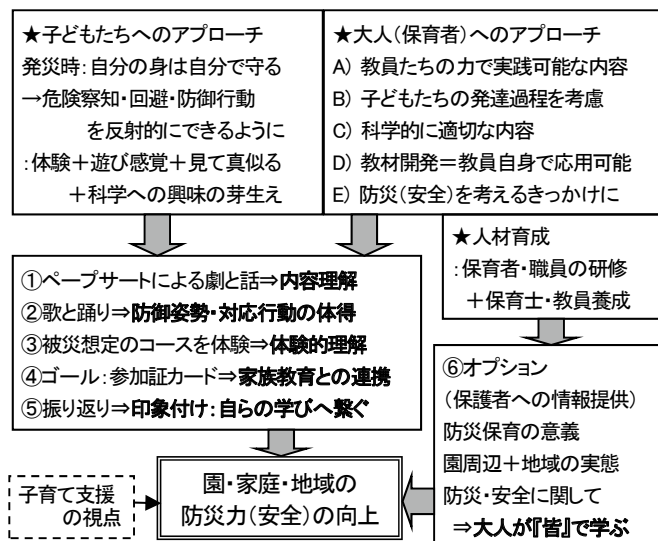


図-1 防災保育の実践内容概略とコンセプト

に相当する箇所(園内風景の一例を図-2に示す。図-2は、各種の体験活動に相当する「ぐらぐら台:足元の揺れ」「ゆらゆら壁:倒れる模擬壁」「じりじり道:危険物の散乱」「まっくらトンネル:暗やみ」「もくもくトンネル:煙」をコースのアトラクションとして設定し、それらを園児が取り組んでいる1シーンである。また、図-3は、図-1中の①に対応する大学生が演じる劇を見る子どもたちの様子であり、どの子どもも熱心に見ていることが分かる。このことは、子どもたちへの印象付けとしても、非常に大きな役割を果たしていることを意味する。さらに、5才児クラスなどでは、図-1中の⑤の保育者による「ふり返り活動」を行ってもらい、④の活動を補完するものとして、参加したすべての子どもたちへの活動の印象付けをより強くし、家庭でも話題提供のきっかけにすることも行った。一連の各種の体験活動などは、保護者たちが見守る中、どの子どもたちも一通り行うことができていた。

防災保育の後には、図-1の⑥のオプションとして保護者と保育者といった大人への教室(講演)を組み込んだ。なお、保護者が参加する形態については、両親が仕事を持つ子どもたちが通う保育園や認定こども園でも要望はあるものの、多くの保護者が実際に参加することは難しく、幼稚園でのみ実施できているのが現状であり、この点は今後の課題である。なお、今回の実践においては、多くの保護者の参加が可能であったため、一連の防災保育の後には、避難訓練が実施され、園内避難・園外避難・保護者への園児引き渡しの各訓練も一体的に行われた。園外避難として、近隣の高台までの2次避難の訓練も実施され、その時の様子の一部を図-4に示すが、気温の低い中であつたにもかかわらず、防災頭巾を被った状態での移動や保護者への園児引き渡しなど非常にスムーズに行われていた。

3. 防災保育実践後のアンケート調査から

防災保育の実践による子どもたちの育ちの様子や保育の効果把握するために、終了後、約2週間程度を回収期間として、保護者向けと保育者向けのアンケート調査を実施した。そのアンケートの内容を図-5に示す。アンケート内容は、無記名形式で、主に、園や家庭での防災意識に関するものや子どもたちの防災保育の効果を問うものとした。回答数は、保護者向けが68件(園児数102名、家庭数92)、保育者向けが8件であり、保護者向けアンケートの回収率は73.4%であった。なお、回答には、「はい(Yes)」か「いいえ(No)」の二者択一の問いと、自由記述として記す問いを設定した。調査に協力的な保護者が多く、たくさんの記載をしてもらい、大人の率直な意見として、貴重な情報を得ることができた。



図-2 防災保育の一風景. 前方に園児と保育者, 後方に保護者 (2枚の写真を接合している)



図-3 ペーパーサートによる劇を演じる
和歌山大生と熱心に見る子どもたち



図-4 防災保育終了後の園外(高台)への
2次避難訓練の様子

◎地震防災保育(教室)についての**保護者**アンケート

- Q1. お子様の年齢とクラスをお教え下さい。
- Q2. これまでに地震や風水害などのもしもの時について、ご家族で話し合われたことがありますか？
- Q3. 家に帰ってから、園で行った地震防災保育について、話をされましたか？話をされた方は、どのようなお話をされましたか？内容をお教えてください。
- Q4. 園での防災保育をもっとやった方が良いと思いますか？
- Q5. 防災保育を行う際には、家庭と園で連携して行う機会が必要だと思いますか？
- Q6. 今回の地震防災教室(保育)について、ご意見がありましたらご記入ください。
- Q7. その他、ご感想やお気付きの点をご記入下さい。

(※2, 3, 4, 5は, Yes or Noの設問)

◎地震防災保育(教室)についての**保育者**アンケート

- Q1. 担当のクラス・年齢をお教え下さい。
- Q2. 実施した地震防災保育について感想をお聞かせ下さい。
- Q3. 印象に残ったものはありますか？ある場合、以下から、2つお選び頂き、その理由も教えてください。
(人形劇, ダンス, ぐらぐら台, ゆらゆら壁, じゃりじゃり道, トンネル)
- Q4. 体験的な防災保育は子どもたちにとって必要だと思いますか？
- Q5. 今回の親子での地震防災教室(保育)を行ったことでよかったと思うこと、こうした方がいいと思うことはありますか？あればご記入下さい。
- Q6. その他、感想やお気付きの点をご記入下さい。

(※2, 4は, Yes or Noの設問)

図-5 防災保育後のアンケートの質問項目

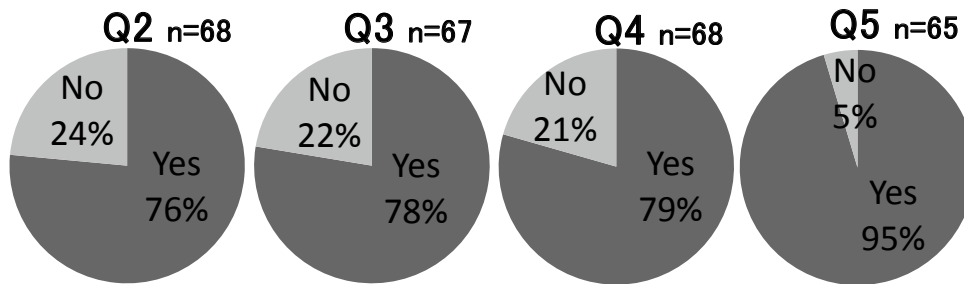


図-6 各設問のYes or Noの回答割合 (nは各回答における母数)

(1) 保護者向けのアンケート結果から

保護者向けのアンケートの集計結果のうち、「はい(Yes)」「いいえ(No)」で答える二者択一の問いQ2~4の結果を割合で表記したものを図-6に示す。なお、nは各母数で、未記入があったため、各数はばらばらである。

Q2「これまでに地震や風水害などのもしもの時にについて、ご家族で話し合われたことがありますか？」は、これまでの家庭での防災意識を問うものであるが、76%の家庭で防災に関する何らかの話をしており、意識の高さを反映したものとなっている。

Q3「家に帰ってから、園で行った地震防災保育について、話をされましたか？話をされた方は、どのようなお話をされましたか？内容をお教えてください。」は、防災保育・訓練後の家庭での様子を問うものであるが、78%の家庭で、園での様子などを話す機会があったことが分かる。その内容(以下、『』内のコメントは原文まま)は、『だんご虫のポーズをとること。他、教えて頂いた事を子供が父親に教え家族でやってみました。』や『揺れる台やトンネルを潜ったり、楽しかったと子供が言っていました。』など、家庭全体を巻き込んだ防災への話題(きっかけ)作りができたものと考えられる。一方、参加できなかった保護者についても、『私が参加できなかったのでどんなにして逃げるなど教えてくれました。』という記載があったことから、子どもたちに印象付き、園で学んだことを家庭できちんと話してくれたことがうかがえる。

Q4「園での防災保育をもっとやった方が良いと思いますか？」では、防災保育の実践の必要性を問う設問であるが、こちらは8割近くが肯定的な回答をしており、防災保育の重要性についての理解があることがうかがえる。ただし、一部には、Noの回答の中で『今でも十分取り組んでくださっていると思っています。』という記述があり、現状で十分であるとする意見もあった。これは、今までの通常の避難訓練の実施のことを指している可能性が高い。また、『適度に…。あまりしすぎると恐怖の方が上に来ると…』という記述もあり、防災保育のマイナスの影響を危惧するものもあった。この点は、災害への漠然とした大人の不安の表れであると推察され、他ではあまり見られない意見である。こうした点は、当該

地域が近い将来に地震による大規模災害の発生が危惧されているという自然的・社会的環境が心理的に影響を与えていることが遠因と考えられる。

Q5「防災保育を行う際には、家庭と園で連携して行う機会が必要だと思いますか？」では、防災教育活動において、園と家庭の連携の必要性を問う設問であるが、95%の保護者が必要であるという認識であり、この点は極めて高い理解を得られていることが分かる。今回の活動の中では、園から子どもたちを保護者へ引渡す訓練が実施されたことから、この点に必要性を感じた保護者がいたことがうかがえる。ところで、Q2~4については、YesとNoの割合がほぼ同程度である。回答票によると、少数だが、Q2でNoと答えた回答者がQ3や4でNoと答えた傾向があったことから、防災意識がやや低い家庭の意見が表れた結果であると考えられる。

Q6「今回の地震防災教室(保育)について、ご意見がありましたらご記入ください。」の防災保育に関する自由記載においては、『様々な体験をさせていただき子供の記憶に残る機会になったと思います。』『身を守る体験をすることが出来て良かったと思います。』といった当初からねらいにしていた防災保育の中に組み込む「体験」活動への高い評価が窺える。また、『久しぶりに家庭で話をするいい機会になりました。是非またしていただけたいと思います。』、『実際に親子で共に行動できたことで、同じ認識を持つことが出来たのでとても良かったです。』という記述からは、親子で参加することの重要性が実感できた結果であろうと考えられる。

Q7「その他、ご感想やお気付きの点をご記入下さい。」の完全自由記述については、保護者向けの講話に関する記載が多く、知らなかったことが知れて良かったといった感想や逆にもっと知りたいといった要望などもあり、大人への教育が必要であることがあらためて示された。また、『(中略)いざ本当に災害に巻き込まれた時、いかに焦らずに冷静でいられるか。それは大人にとっても子供にとっても難しいことです。このように楽しみながら学べるということは、少しでも恐怖感を取り除いてやることが出来るとてもいいです。』という前述したように、地震や津波の災害への怯えが垣間見られるコメントがあった。さらに、『他の避難訓練と合わせて引き続

き行ってほしいと思います。』『また、こういう教室を開いてほしいと思います。』といったリクエストコメントもあり、今回の防災保育が保護者など大人にも受け入れられた結果であろうと考えられる。

(2) 保育者向けのアンケート結果から

保育者向けのアンケート結果からは、Q2の感想を問う設問からは『話だけでなく実際に体験出来て良かった』といった回答があり、体験型を目指した著者らの意図するものが現場保育者にも感じてもらえたものと言える。また、『身近な素材で防災訓練ができるアイデアは生かせるか』といったコメントからは、図-1に示した大人へのアプローチ内容がそのまま反映されたものであり、この点も上記と同じことが言える。これらのコメントから、こうした一連の活動経験を経て、園の現場の教職員でも、これなら自分たちでもできるという自信を付けさせる効果もあったのではないかと考えられる。Q3の印象に残った内容を問う設問では、8名中6名が「ぐらぐら台」を挙げており、体で感じることの大切さが実感できた結果でもあり、Q2の感想の主なものと対応するものである。「人形劇」も8名中3名が挙げており、園で親しまれている劇に一工夫加えれば、日常を活かした防災保育になるという点を認識してもらえたのではないかと考えられる。Q4の防災保育の必要性については、100%肯定的な意見であった。Q5では、親子で参加することの重要性を記すものが多く、園と家庭の間を取り持つ機会の必要性を実感したようであった。Q6の自由記述では、『今回職員と子供ではなく、第三者の方に指導していただいたことは、子供にとっても保護者にとっても刺激となり良かった』とコメントがあった。この点は、園や子どもたちと直接的な関係者ではない防災や幼児教育の専門家の介入の価値を意味するところであろう。

なお、防災保育後のふり返りの活動の中で子どもたちの感想では、「楽しかった」という声が大半であった。子どもたちの言語表現能力の発達過程を考慮すれば、今後防災保育を継続していくためにも最高の答えであり、防災保育の内容・方法がそれなりに適切であったと言える。これまでの避難訓練の際などで、怯えて泣くことや行動が固まってしまう子どもたちがいる現状を鑑みれば、次に繋がる反応であり、むしろ適切な反応であったといえる。

こうしたアンケートでは、結果的にあまりマイナスのコメントは出にくいとされているため、防災保育の中身およびアンケート内容の妥当性の客観的な評価については、今後さらなる検討を要するが、アンケート結果などから今回実施した防災保育は、おおむね子どもたち・保育者・保護者の三者に防災教育に対する満足感を与えることができ、プラスの効果をもたらすことができたものと判断できた。

4. まとめ

本報告では、和歌山市立岡山幼稚園で取り組んだ防災保育の実践と事後アンケート調査結果について報告した。防災保育の中では、アトラクションに少し不安を感じながらも保育者と一緒に取り組もうとする年少児がいたり、友だちと様子を見ながら体験していく年中児がいたり、ぐらぐら台を体験してみて「揺れる」ということを実感でき、その後のトンネルにも積極的に向かっていった年長児がいたり、年齢に応じた子どもたちの育ちの姿が随所に見られた。また、オプションとしての大人への講演の後には、保護者から居住地域の気になる点や家具の対策についてなど、具体的で積極的な質問が続いた。こうしたことから、今回の防災保育の内容や方法が適切であり、子どもたちや保護者、保育者などそれぞれに有益な機会になったことがうかがえた。

アンケート結果からは、当該地域は、近い将来に地震による大規模災害の発生が危惧されている分だけ、他の地域よりも大人たちの不安が大きいことが分かった。特に、その対策について各自でまちまちであるため、単に‘不安を持っている’というケースもあり、こうした取り組みによって、各自で何かができるという安心にもつながることができたものと考えられる回答もあった。

乳幼児への防災保育の充実化には、園の実態を十分に考慮しながら、保育者・職員と保護者への防災教育（再教育）が必要であるとともに、乳幼児教育と防災に関する専門性の融合や専門家の力も必要であることがあらためて示された。これらの取り組みは、子どもたちの育ちの手助けとなるだけでなく、防災保育⇒園児の避難訓練⇒保護者の訓練と教育の流れを作り、さらに子育て支援への配慮も含めれば、保護者の積極的な参加を促し、園と保護者および保護者間の連携をしやすい雰囲気を作り出すことができ、防災訓練を継続させ、充実させていくことに有効であるといえる。また、こうした防災保育の実践活動を通じて、多くのメリットを相互に享受できるようにする「しかけ」は、園やその周辺地域の防災力の向上とともに、継続性に寄与する重要な要素であるといえる。

今後も、地震災害が危惧される地域での防災保育研究を推進するにあたって、保護者の不安を考慮し、子どもたちを守るための取り組み実践を蓄積し、子どもたちにとってより有益な内容方法を模索していきたい。なお、和歌山市立岡山幼稚園では、2015年10月にも同様な防災保育の実践活動を行い、アンケート調査を実施している。本報告で示した結果と2015年10月の結果との比較など、別の機会に報告したい。

謝辞：

ここで記した防災保育の実践および事後アンケートは、和歌山市立岡山幼稚園の岡本史園長先生をはじめとする園の先生方・職員の方々、保護者の皆さま、園の子どもたちのご理解・ご協力により実施することができました。また、本報告の内容の一部は、和歌山大学教育学部児童教育コースおよび美術専攻の学生の有志のご協力により実施されました。なお、本研究は、JSPS科研費（基盤研究(C): 25350206）の一部を活用しました。関係者各位に記して感謝いたします。

参考文献

- 1) 山田伸之，丁子かおる：乳幼児からの体験型地震防災保育プログラムの開発，日本保育学会第65回大会，B2，090，2012.
- 2) 文部科学省：学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開，223pp.，2013.
- 3) 気象庁：緊急地震速報について，<<http://www.data.jma.go.jp/svd/eev/data/nc/index.html>>，2015年12月8日アクセス.
- 4) 文部科学省：特集「学校における安全教育の充実」，初等教育資料，12月号，No. 867，pp. 2-37，2010.
- 5) 阿部真理子，目黒公郎：保育園等の防災力向上に貢献する防災ワークショップ（目黒巻WS）の提案，生産研究，Vol.57，No. 6，pp. 538-542，2005.
- 6) 伊村則子，石川孝重：幼稚園の現状調査に基づく早期防災教育教材の制作，2006年度日本建築学会関東支部研究報告集，pp. 221-224，2006.
- 7) 日本保育学会：災害時における子どもと保育，日本保育学会第64回大会緊急シンポジウム報告書，239pp.，2011.
- 8) 山田伸之，丁子かおる：地震防災保育実践からみえてきた園とともにつくる視点，日本保育学会第67回大会，P144048C，2014.
- 9) 山田伸之：地域性を考慮した防災保育の実践活動から，日本安全教育学会第15回宮城大会 仙台ワークショップ2014 防災教育／復興教育の研究と実践，WS-04，2014.
- 10) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，299pp.，2008.

(2015. 12. 18受付)